



I N T E R V I E W

日本財団パラスポーツサポートセンター
特別プロジェクト推進部 特別プロジェクト推進チーム チームリーダー

影山 範子さんに聞く

[聞き手] 外川 智恵さん 大正大学表現学部教授

i enjoy!

パラスポーツの普及を通して
多様性を認め合う
社会の実現に貢献する

C L O S E U P

かげやま・のりこ

1986年生まれ、神奈川県出身。青山学院高等部在学中にアメリカ・カリフォルニア州の高校に留学を経験。2006年に青山学院大学に進学。在学中に全日本・関東大学サッカー連盟のスタッフとして活動。全日本大学サッカー選手権大会のプロモーションとして「I PLAY FOR プロジェクト」を手掛ける。卒業後、Jリーグのクラブチームなどに勤務した後、日本財団パラスポーツサポートセンターに入会。パラスポーツ関連のイベントの企画・運営等を担当。

障がいの有無にかかわらず 共に楽しめるのがパラスポーツ

外川 今回、お話を伺いするのは、日本財団パラスポーツサポートセンター（以下、パラサポ）の特別プロジェクト推進部でチームリーダーを務めている影山範子さんです。2024年に開催されたパリパラリンピックも記憶に新しいところですが、影山さんはパラスポーツにどのような形で携わっているのでしょうか。

影山 パラサポに在籍してもうすぐ8年になりますが、東京2020パラリンピックの開催前後で仕事内容が変化しました。開催前は、開催に向けた気運醸成のため、パラスポーツを観たことがない人にその魅力を伝えたり、パラアスリートたちの人柄を伝えるイベントの企画や運営を手掛けていました。具体的には、パラスポーツと音楽を融合させたフェス「ParaFes」や、障がい者と健常者が一つのチームとなってタスキをつなぐスポーツイベント「パラ駅伝」などです。開催後は、パラスポーツを起点として、DE&I^{*}社会をさらに推し進めていくことを目指して、さまざまな活動に取り組んでいます。

外川 パラスポーツとはどういうものか、影山さんの言葉であらためて教えていただけますか。

影山 パラスポーツを障がいのある人のためのスポーツだと位置付けるのは、個人的には少し違うと思っています。障がいのある人もできるスポーツというように捉え方もあると思いますね。例えば、脚に障がいがある人と健常者が、普通のバスケットボールを競技として一緒に楽しむのは難しいですが、パラスポーツの車いすバスケットボールであれば、健常者が車いすに乗ることで同じ条件でプレーすることができます。道具を使ったり、ルールを工夫したりすることで、障がいの有無にかかわらず誰もが一緒にスポーツを楽しめる。そういう意味では、ユニバーサルスポーツのような捉え方もあるかもしれません。

**“偏った普通”に気付く
さまざまな要素から
“普通”をカラフルに**

外川 影山さんにとってのパラ



外川 智恵さん

スポーツの魅力、パラスポーツに携わることの面白さとは何でしょう。

影山 今までの人生で出会ったことがなかったパラスポーツという新しいコンテンツに出合えたこと、それを通して多くの人々に出会えたことに喜びを感じています。また、困難な局面に対峙したとき、地道な努力や柔軟な思考力をもってそれらを解決しようと励む選手たちの姿を見ると、自分も諦めずに辛抱強く頑張ってみようと思えます。そうした学びがあることもパラスポーツの魅力だと思います。先ほどお話ししたように、誰もが競技を楽しめるように、道具やルールにさまざまな工夫が凝らされているのも、パラスポーツの面白さの一つです。自分とは違う特性を持つ人と一緒に何かをするために、何が必要か、何を変えるべきか、といったことを考える思考力は、日常生活でも生かされると思います。パラスポーツを観戦する時は、毎回、何か一つ新しい発見をして帰ることをいつも意識していますね。

外川 私は以前、障がいのある方がパフォーマンスをする舞台を手伝った経験があるのですが、参加している皆さんが頑張っている姿に感動する一方で、皆さんを

伝いする〴〵という感覚や立場にいたように感じられて、反省してしまうこともありました。そうした考え方・感じ方については、どう思われますか。

影山 私はパラスポーツのアスリートと観客との関係は、普通のスポーツと同様にギブアンドテイクの関係にあると思っています。

健康者同士でも自分にできないことをやっていたり、頑張ったりしている人を見ると、感動したり、刺激を受けたりします。障がいがある人の舞台やパラスポーツを観ることで、自分も頑張ろうと思えたら、それは全く後ろめたさを感じることではないと思います。

外川 影山さんのお話を伺って、もやもやとしていた気持ちが晴れた気がします。東京パラリンピック開催に至るまでにさまざまなご苦勞があったことと思いますが、特に印象に残っている出来事がありましたら教えてください。

影山 私がパラスポーツに関わりたいと思うようになって



影山 範子さん

たのは、スポーツが好きだったことかもしれませんが、それ以上に障がい困っている人のお手伝いをしたいという気持ちが強かったからです。しかし、実際にパラスポーツに触れてみて、その考え方が「偏った普通」に基づいていたことに気付かされました。私にとつての「普通」は、私が人生で出会った物事からしか形成されていません。しかし、身体に障がいのある人や異なる人種の人、異なる宗教を信じる人など、さまざまな人と出会い、視野が広がると、それまで「普通」だと思っていたことがとても狭い世界で成り立っていたことに気付いたんです。そこから、障がいのある人をお手伝いするというより、スポーツを自然に楽しむ中で多様性を認め合える環境をいかにしてつくっていくかを考えて、イベントのプログラミングを行うようになりました。「普通」は日々ブラッシュアップされていくもので、さまざまな要素が混ざり合って、どんどんカラフルになっていくものだと感じているので、皆さんの思考をカラフルにしたいだけでなく方法を日々考えています。エンターテインメントを通して多様性について正しく伝えるのはとても難しい作業でしたが、その分、やりがいも大きかったです。



アメリカの高校に留学して受けた衝撃

外川 影山さんは高校時代にアメリカに留学されたそうですが、早いうちに海外を経験してどのような刺激を受けましたか。

影山 青山学院高等部に通っていたのですが、2年生の夏からカリフォルニア州の高校に留学して英語を学び、卒業資格を得てから帰国して復学しました。留学当時は大統領選挙が行われていた時期だったのですが、同級生たちが支持している候補者のTシャツを学校に着てきたり、選挙に関する討論会に誘われたりしたことに大きな衝撃を受けました。日本では若者の投票率が低いことが問題になっていますが、アメリカの高校生たちはまだ選挙権がないにもかかわらず、大統領選挙を自分ごととして捉え、国の将来を真剣に考えていたのです。それまで、私は自分が想像する楽しいこと、幸せなことは当たり前に享受できると思っていました。しかし、同級生たちは、政治や宗教、人種問題など、さまざまな課題を解決していかないと本質的な幸せは手に入らないということを主張していたのです。それを聞いて、自分の幸せを獲得す

るために、もっと世の中に自分が関与していかねければならないと考えるようになりました。

外川 今のお仕事にもつながるような体験があったのですね。青山学院大学の経営学部に進学されましたが、どのような分野を専攻されたのでしょうか。

影山 大学では広告学とスポーツマネジメントを専門的に学びました。広告学を専攻したのは、アメリカに留学していた時、人に何かを伝えるには言葉や絵、音楽などいろいろな手法を知っておくことが重要だと実感したからです。スポーツマネジメントという概念は、体育会サッカー部の監督も務めていた宮崎純一先生の授業で初めて知りました。私は幼少期からサッカーが大好きでサッカー業界で働きたいという夢があったので、やりたかったことはまさにこれだと思いました。履修していない授業も聞きに行っていたほどです。

外川 広告論のゼミに所属していたそうですが、どのようなことを学ばれたのでしょうか。

影山 とても自由なスタイルのゼミで、テキストを開いて先生の話の聞くというようなことは一切しません。自分が好きなものを相手に理解してもらうにはどうすればい

いかなど、毎週与えられるテーマについて学生は自由にプレゼンをします。それに対して、言葉選びは適切だったか、表現の仕方をもっと工夫できなかったかなどを検討して、プレゼンをブラッシュアップするのです。広告の専門的な知識を身に付けるといふより、広告表現を体験的に身に付けていくようなゼミでした。

外川 とても大きな刺激を与えてくれたゼミだったのですね。その中でも特に思い出深いことはありますか。

影山 先生がおっしゃっていた「あなたが生きていく生きざまこそが広告である」という言葉がとても印象に残っています。「広告を学びたい学生は、このCMはどういう手法で作られたのか、このポスターの意図は何なのか」ということをよく聞きにくるけれど、広告はコンピューターが作っているのではなく、人が作っているわけだから、日々の生活の中でどれだけ人の感情を豊かにできるか、人が何に興味を持っているかといったことをくみ取る力を養うことが、手法を学ぶよりも大切だ。だから私は、あなたの『生きざま』をもっと豊かに、しなやかにする方法を教えます」ということを最初の授業でおっしゃったのですが、今でも心に残っています。

外川 それから社会に出て、影山さんにとって「生きざま」とはどういうものになりましたか。

影山 「生きざま」と言えるものが今の自分にあるのかどうかわかりませんが、私にとつての「生きざま」は、自分がどんな表現して、それに対して相手からリアクションをもらうことの積み重ねによって形成されていくものだと思います。そうしていつか周りから「影山さんらしい『生きざま』だね」と言われるような仕事をしたいと思っています。

学んだことを試す機会を作ることが大切

外川 大学で学んできたことが、今の仕事で生かされていると感じることはありますか。

影山 学んだことが生きているというよりも、今が学びの延長のような感じですね。高校・大学には個性が強くて自由に夢を描いている同級生が多かったです。自分の周りのコミュニティには障がいのある方は一人もいませんでした。そう考えると、学生時代に多様な考え方を吸収したつもりでしたが、パラスポーツに携わっている



今の方が多様な人々と出会い、多くの刺激を受けているように思います。ただ、多様性を受け入れつつ、自分をしっかり主張する姿勢は、大学でさまざまな価値観の学生と学ぶ中で育まれたと感じています。

外川 ご自身の経験を基に学生に一つアドバイスをするとすれば、どんなことを伝えたいですか。

影山 勉強ももちろん大切ですが、学んだことがどう役に立つのかを試す機会を持つことをお勧めします。縛りのない学生のうちとにかくいろいろなところに足を運び、いろいろな人と会話をしてみる。そうすると、なぜ今この学びが必要なのかということが分かったり、もっとこういう学びが必要だと気が付いたりして、**「させられる」**のではなく**「したい」**と思える学びに出合うきっかけが得られるからです。

外川 影山さんは、どのように学びを試す機会を作っていたのでしょうか。

影山 私の場合はインターンシップを経験したことが大きかったですね。先ほどお話したスポーツマネジメントの授業を担当していた宮崎先生から、全日本・関東大学サッカー連盟の広報・PRの仕事をしてみないかと声

を掛けていただいたんです。広告学で学んだことの実践の場になるはずだと考えて、1年次から4年間お手伝いさせていただきました。

外川 インターンシップからはどのような学びが得られましたか。

影山 サッカー業界で仕事をしたいという夢があったのですが、当時は女性がサッカー業界で働く例は今ほど多くなく、実際に就職先はあるのか、どんな仕事があるのか、といった情報もあまりなかったため、目標が漠然としていました。しかし、実際にサッカー業界の一端に入り込み、仕事をしてみることで就職後のことを具体的にイメージできるようになりましたし、自分に足りないスキルも見えてきました。

DE&I社会の “アテンダー”を目指して

外川 現在、パラサポに勤務されていますが、きっかけは何だったのでしょうか。

影山 卒業後は、子どもの頃からの夢をかなえて、サツ

カー業界に就職しました。

最初はJリーグのクラブチームに勤め、転職して全日本・関東大学サッカー連盟でPRを担当していたのですが、東京2020オリンピック・パラリンピックの開催が決まって、スポーツに携わる人間として何らかの形で関わりたいという気持ちが強くなっていったのです。そこで、興味を湧かせていたパラスポーツに尽力しているパラサポへの就職を希望しました。

外川 東京パラリンピックが終わり、パラスポーツを通してDE&I社会をさらに推し進めていくことが現在の目標だと冒頭に伺いましたが、個人的にはどのような仕事をしたいと考えていますか。

影山 パラサポではパラスポーツを観戦してほしいとPR



するだけでなく、教育の現場にパラスポーツを取り入れることで、多様性を認め合うことの大切さ、それが与えてくれる心の豊かさ、人生の豊かさを伝えていくような教育プログラムにも力を入れています。プライベートでは、まだ

パラスポーツを観たことがない友人を観戦に誘ってみるといふ活動を地道に続けています。また、普段、遊びに出掛けたり、

食事に行ったりする時に障がいのある友人を積極的に誘うなど、多様性のある環境を日常の中により多くつくり出すことも意識しています。そうすることで、D

E&I社会の「アテンダー」のような存在になっていくことが個人的な目標ですね。

外川 実際に触れ合う機会を作ることとはとても大事ですね。私も授業で社会課題について学生と話し合うことがあるので

ですが、当事者に話を聞くことで一気にふに落ちる瞬間がありました。私も教育者としてそうした触れ合いの機会を増やしていきたいと考えています。

影山 SNSなどを見ていて気になるのが、男性はこうだ、

女性はこうだ、日本人はこうだ、といった具合に主語を拡大して議論をする人が多いことです。そうして大きくひとくくりにしてしまうと、どうしても極論に陥ってトラブルを起こしがちです。ですから、私も障がい者はこ

うだとひとくくりにするのではなく、一人一人に目を向けて、それぞれと触れ合う時間を増やすことを重視していきたいと考えています。一人で世界中の人と触れ合うことはできませんが、私と同じように障がいのある人と触れ合う人が増え、それが当たり前になれば、もっと優しい世の中になるのではないかと思います。

外川 とても前向きにご自身の目標を達成していかうとする影山さんの姿勢に感動しました。今後、パラスポーツがどのようなように発展していくか注目していきたいと思えます。

本日はありがとうございました。

※ 「DE&I」は「Diversity (ダイバーシティ、多様性)」「Equity (エクイティ、公平性)」「Inclusion (インクルージョン、包括性)」の頭文字からなる略称です。

